

研修医のまどい

梅雨

滋賀は梅雨曇りだ。

昨日はマッチングアプリで知り合った人と京都府立植物園に行った。あじさいと一緒に見たのだが、色んな種類があるものだ。私はその人を好きなのかどうかわからない。その人と直接会ったのはこれが初めてだ。感じは悪くないが、私がどうしたいのかまだはっきりしない。考えるともやもやするから考えないようにする。

UNICORN のベスト盤を聴きながら電車は京都に向かう。奥田民生さんが人のライブに出たが、泥酔してろくに歌わなかったと聞いた。その人の歌を YouTube で聴いたが私の好みではなかった。それで一瞬、奥田民生さんが泥酔してもしかたないかなと思ったが、どんな理由があっても侮辱されることは誰にとっても耐えがたいことだ。まして私は小さいころから同級生、先輩、後輩、先生などさまざまな人からバカにされて来て、バカにされることが死ぬほど嫌になった上、人のことをあまり信じられなくなっているのだから、いくらライブの人の歌がつまらなくて気に入らなくても奥田民生さんの行為を許すわけにはいかない。

たしか夏目漱石が「余は諸君らの台所に卑しいものを届けたことはただの一度も無い」と言っていたような気がした。調べても出ないから私の勘違いかもしれない。ただ、この言葉の表す気持ちは大好

きで、卑しくないものを世の中に出すことはとても大切だ。五代目古今亭志ん生が言ったように芸には人間が出る。卑しい人間は卑しい芸になる。軽薄な人間は軽薄な芸になる。かたい人間はかたい芸になる。だから自分の中身を卑しくないようにするのは大切なことだ。自分で「これは卑しくない」などと思っても、日頃が軽薄だったら出るものは全部軽薄になる。軽薄な芸は見るに耐えないと思う。軽薄な芸を世の中に流して世の中を軽薄にすることに憎しみや腹立ちを覚える。でもそうしたら自分も許せなくなるから面倒だ。自分だって軽薄で卑しい部分が沢山あるからだ。

批判というものは自分に返ってくる。だから人のことは見たくない。見ればさまざまな批判が湧くからだ。批判が湧けば、自分自身にも同じ批判が向いて、生きるのが辛くなるからだ。

私は昨日デートのあと、一人で上賀茂神社に行った。宮では夏越の祓をやっていた。青々した茅の輪はいいものだ。新しい草のおいと上賀茂神社の境内の川の瀬の音が混ざって私たちの頭のごちゃごちゃを少しだけ風通し良くしてくれる。梅雨曇りの下で頭と心を悩ませるということはしたくない。先のことを考えると、「こんな生活が一生続くのか」と思うと、誰しもやり切れなくなる。本当は人間の頭で先のことは一ミリも分からないのだ。先のことを考える人間は病気だ。しかも

誰もがもっと先のことを考えるように互いに圧力をかけるから、耐えられなくなった人が死んでしまうのは無理もないことだ。

頭が悪くても性格が悪くても体がモヤシでも現在ただ今のことだけ見ておればよいのだ。未来のことも他人のことも見たくない。それはウィリアム・オスラーも言っているし、新約聖書にも書いてあるし、神道でも中今というのだから正しいことだ。

中今を邪魔する魔障は全て滅ぶべきだ。

中今についての調査は進んでいない。

今日は臨床文藝の集まりだ。私は徳利と日本酒を持って行く。割れないように気をつけながら、湿気に満ちた滋賀を南下しながら、結婚したいなあと思ひながら。

空谷子しるす

(2022.6.19)

当直明けの明け

今日は当直明けの明けだ。

くそ暑い。関西はもう梅雨明けらしかった。私の髪を切ってくれた美容師の人がそう仰っていた。美容院には猫がいた。白くて巨きな男の猫だ。

明けの明けは体が重い。当直は熱中症が5人くらい来た。あとは「1~2週間前から調子が悪い人」が何人か来た。なんでわざわざ今日くるのだろう。2年目の研修医があなたの愁訴を解決できると思うのか？やれるだけはやります。でもやれるだけしかやれません。あとは知りません。

疲れていると落ち込む。この間デートした人は今週末法事があるらしい。そもそも好きかどうかはわからん。僕が女をえり好みするのが悪いという説は依然として有力だ。

結婚相談所の事務員は「積極的に活動しなさい」を繰り返していた。私に対して具体的な改善点を挙げることはないように思われた。彼女は私のことを「内気で弱気で奥手な男」だと思っているようであり、あらゆる女性のことを「素敵なお相手」として私に薦めてきた。私との相性とかを無視しているように思われた。適当な女性をあてがって、はげましてやれば喜んで食いついてカタがつくと思っているのか？と、私はいつものように被害妄想に火がつき、怒った。怒りの休会届けを提出している。さっさと退会できないのが私の愚かさだ。入会金11万を損切りできない。馬鹿だ。

東近江の山々が漠然とした近江平野にぼこぼここと並び立っている。その奥の鈴鹿山脈は夏の空気に霞んでいる。

むこうのホーム、駅舎の中、街の中に美しい女性は無数にいるのに、私はその誰とも縁がない。

小さい頃から三輪明神の夫婦石に願をかけているが、私の中のきたない心が見透かされて、いまだに縁がない。

大国主命は大変モテたが、たしかに私は彼ほどのカリスマは無いのだ。因幡の白兔神社にも行ったが、私はウサギより猫派だ。

明日から精神科なのだ。明るくなれない。

若い頃の椎名誠みたいになんでもケトバせるようになりたかった。もちろん椎名誠だって悩んだし、苦労はしたのだ。でも僕も少し苦労したのだから女と付き合えるくらいあっても良くないか。

空谷子しるす
(2022.6.26)

晴れている

このところ雨が続いたがそれが一段落して晴れている。
精神科のために外病院に出ねばならない。毎日そちらに行く。毎日病棟をぶらぶらして気のないカルテを書く。気のない割には気を遣っているから、毎日妙に疲れる。
精神科とは奇妙なところだ。患者たちはたしかに普通でないようだが、冷静に考えたら別に大して変わらない人間である。誰だって気に入らない時は殴りたくなる。パンツを脱ぎ散らかしたり、訳がわからなくなって小便をそこらにする。「そんなことはしない！」と言える人はよほど幸せな頭をしている。前後不覚になって、あたかも異邦人が太陽の光のために殺人を犯したように、赤と黒の中で青年が殺人を犯したように、そうした人間の混乱をつゆしらず、親の金でのうのうと暮らしてきたのだろう。そうした人たちは叩き起こされて寝ぼけたことすらないようだ。人間存在に絶対の自信がある、幸せな自力信仰の自由主義者だ。
ストレスがかかると性的な欲求が出る。人間には常のことであるが、自慰をする

といかにも情けなく、自らが下等な人間に思われる。不細工な顔がますます不細工に、矮小な体軀はますます貧弱になる気がする。しかし身を焼く情欲はどうしようもない。一年目の研修医に風俗に詳しい男がいる。彼に今度神戸の福原を案内してもらおう予定だ。ナポレオンが金を払って童貞を捨てたような哲学的な体験ができるとは思わぬ。なにしろ私の陰莖はここぞのときに勃たない可能性が高いのだ。ああ私は実に世間に無用な男だよ。みんな私をどうか憐れんでください。しかし侮辱せずに一人の人間として認めてください。私はなんの能力もないが、侮辱されることが宇宙で一番嫌いなのです。私に寄る女性はみな年上か、器量も教養もない女性ばかりだ。そのたびに私は絶望する。私はとんでもない女に支配されるか、あるいは 38 から 45 歳の女性と結婚して子を諦めねばならぬ。誰もが私をたしなめる…私は身の程知らずにも子どもを持ちたいと願い、平穏な家庭を望んでいるからだ。私に年上の女性を薦める人たちは悪気なく私の本質を見抜いている。私に家庭を持つ価値は無いと言うのだ。聖パウロ、あなたは独身でいるならその方がよいと仰ったが、望まないで独身でいさせられる苦しみは大きいものがある。全ては私が愚かにも年齢や顔、教養、考え方があうかどうかで女を選別するのが悪いのだ。私がつまらない人間というのはそれだ。私はまともに女と付き合えたことがない。女に相手にされない男になんの価値があるのか。

精神科の病院は犬上の土地にある。犬上の土地は渡来の人々の匂いがする。安食の神社は百済氏の作庭の日本最古級の庭がある。天稚彦を祀る宮があるのは、彼は高天原に弓引いた男だから、とても珍しいことだ。犬上の土地は明のだけの歴史ではなかったようだ。しかし諸々の罪穢れはとどまらず、生まれては流れゆく。

私はなんのために生きているのだ。天津神、国津神、どうか私に生きがいを与えてください。私によい医業とよい妻とお与えください。

しかし医業はともかく、妻は「もの」ではないのだから、私のような醜い外道のもとへ来ることは永劫あり得ない。

空谷子しるす
(2022.7.6)

ある老師の話

その神父は箕面の田舎のおじいさんであって金勘定が好きだというのだ。

「そら楽しみなんてほかにあらへんやん」といいながらヒヒヒと笑うのだ。とんでもない坊さんである。

彼が中宮寺の話をした。

「昔中宮寺に若い男が来たんよ。その男は日がな一日仏さんの前に座って動かなかった」

ワインをのみながら箕面のオッチャンは語る。

「夕方になって小僧さんが門を閉めないとならんのにその男はまだおる。日が傾いていよいよ日没と言う時になってもま

だおる。しかたなくもう時間ですと言うと、男はようやく立ち上がって帰っていった。その翌日男は出征して戦地から帰ってこんかった」

神父は赤ワインを飲む。店の電灯がワインの面に映ってきらきらしている。

「僕もややこしいことや嫌なことがあったら中宮寺の仏さんのところに行くんよ」私の出身は奈良であるから斑鳩はよく知っている。翌日私は法隆寺に向かった。

中宮寺は法隆寺のすぐ隣にあるから、法隆寺の前に車を停めれば歩いていける。法隆寺の拝観料は 1500 円と極めて高いからそれは入らずに、土堀と石畳の道の中宮寺までてくてく歩く。

中宮寺は尼寺である。

皇室の女性が出家するいわゆる門跡寺院であって、ちいさな寺は全体的に風雅な趣がある。中宮寺の拝観料は 600 円だ。常識的と言えよう。

本堂は山吹の花に囲まれた池に浮かんでいる。

その中に如意輪観音半跏思惟像がおわします。

蝉が鳴いているのは梅雨が明けたのであった。

池の傍で亀が甲羅干しをしている。

今日はよく晴れた。暑い中に風が吹き抜ける。奈良盆地特有の焦熱が心地よくて助かる。

漆黒の御仏は微妙な表情で衆生を救う手段を考えている。

人間一切が救われることは無いかもしれんが、考え祈ることは…

他人の痛みを取れずとも、我もまた悩み痛むならば…

斑鳩は晴れている。小宇宙のようなきれいな寺と汚くて埃っぽい地べたが混ざる。野の花が咲いている。私は腹が減ったから街に向かった。

空谷子しるす
(2022.7.11)

角鹿

角鹿と書いて「つぬが」と読む。つぬがというのは敦賀の古名であって、昔当地に渡った新羅の王子都怒我阿羅斯等（つぬがあらしと）にちなんでいる。

人の世は不穩に満ちておった。先の首相が射殺されたり、日本国内の給料が上がらなかったり、露国の独裁者と烏国が戦争したりしていた。病棟では患者が不穩になり、扉を乱打する音が響いていた。

私は氣比神宮に行くつもりになった。とてもよく晴れているから氣比神宮に行くのだ。

ラジオは藤井風の「まつり」を流していた。祭りは神様がいなければ塩味の無い塩のようなものだ。神様と人々が楽しむのが祭りである。

敦賀の氣比神宮は神宮の名を持つ通り立派なお宮である。清々しい風が吹き抜けて邪な思いは流れていく。都怒我阿羅斯等を祀る角鹿神社は氣比神宮の摂社である。隣には子どもを守護する兒宮があり、静かに鎮座ましましています。

昨日は重症心身障害児の在宅訪問診療を見学した。

人は人を見ると間違える。

夜、鹿児島島の桜島が噴火した。

世は乱れ、さまざまに入れ替わる。御代替わりとはそうしたものであろう。人間はいい加減なものだ。今の世に褒められる人間に英雄の例しは少なく、全てはただ夢中の中に行われて先の世で検められる。

人間を見ない方が良い。夜の闇に目を凝らす。

空谷子しるす
(2022.7.24)

精神科 1

「あの先生はエビデンスに基づいていない。注意したほうがいい」

ある医師が私の指導医について警告を発した。

私はといえば、教科書やガイドラインをよく読まないのが当該医師が標準治療から逸脱しているかはわからなかった。指導医のうけもつ患者の半分を担当し、彼らの話を聞いて回るので精一杯である。

しかし患者たちは安定を見せた。

私の研修病院ではどつぼにはまるしかなかったような高齢のアルコール依存患者が生き延びて、立って歩いて帰った。

入院したらどのみちある程度落ち着くものだろうか。外来患者のコントロールも悪くないようだった。

統計をとれば医師たちの「優秀さ」は評価できるものだろうか。エビデンスは有用であるが万能ではないことは全ての医師が認識している。その上で、多くの医

師はエビデンスに基づかない治療をする医師のことを憎悪し、知識の浅い研修医を侮蔑する。

「エビデンスというのは医者で、患者からみたらいい医者というのは全く別だ」

箕面の神父は言った。

「自分が信頼できるかどうかだ」

医療界には「やさしいヤブ医者」という言葉がある。

患者にやさしく、信頼されるが、医学が疎漏なので患者を死なせるというのだ。

こうした医師がただのヤブ医者よりもはるかに有害だとされ、平凡な医師たちは日頃己の命を削ってエビデンスを追究する。医学は無限に更新され、常に「お前の治療はエビデンスにもとる」と陰に日向に侮蔑される恐怖と戦わなければならない。

少し話がそれる。

こうした状況下で「頭の悪い奴は医者をやめろ」という言説が現場で飛び交う。無能な人間は有害だと言うわけだ。そこには互いに補い合うといった発想はない。体育会系部活動に表れるような、日本の学校教育における実力至上主義を背景とした無能を排除する構造を私は疑う。それはとても合理的に見えて人間を使い潰す思考である。組織はむしろ脆弱になり、慢性的な人員不足から優秀な人間までも破滅していくことを私は予想する。

話を戻す。

優しいヤブ医者という現象は本当に出現し得るのだろうか。

箕面の神父によればそれは嘘だと言う。

それはそうだ、患者も馬鹿ではないから、おのれに真摯に向き合う医師かどうかは分かる。真摯な医師であれば、真摯さ故に完璧でなくとも最善の治療を彼ないし彼女の力の範囲内で行うはずだ。結果的に現代の標準治療を「すべての点において」遂行することができずとも、患者は不平であろうか。

むしろ知識で武装した上で高慢かつ冷徹な態度を取る医師を患者は納得するだろうか。

私の兄は刑事だ。ある人が死亡し、死体検案書を要することは多い。三次救急病院にかかりつけであった場合、その医師はしばしば死体検案書を拒否する。

「警察はなにもわかっていない」「私は今忙しいんですがね」彼らの苛烈な職場環境は彼らを残忍な人間にしていく。彼らが愚かだと思ふ人間たちを見下し、人の死を軽侮し、自らが修羅道を往くことのみを誇りと生き甲斐を感じる。

やむを得ないことだ。理知、合理の修羅道におかれた人間がしだいに修羅に変ずるのは当人の責任ではない。本居宣長は古事記伝の中で理知、合理の精神を「からごころ」と呼び批判した。細かくは覚えていないが、実用性がなく硬直的で戦闘的という欠点があるということだったように思う。実用性の無さについてはどうだかはわからない。西洋科学の理知、合理は患者たちの疾患に一定の有用性があるからだ。しかし理知、合理の追究は人をだんだん戦闘的にする。医療はおの

ずから人間と向き合う領域である。人間の不合理性も認識せねばならない。理知のみの修羅に果たして人間が診られるだろうか。理知のみの修羅に診てほしくないから「共感と傾聴」などという言葉が昨今の医学教育に頻繁に出現するのではないか。患者も馬鹿ではない。理知の修羅の形式的な共感と傾聴は無価値であることを見抜いている。

しかしながらエビデンスというものの有用さも大切なことは論を俟たない。

できる範囲で私もやろうと思う。

できる範囲でだ。

空谷子しるす

(2022.7.27)

精神科 2

患者の女性がまた飯を食べられなくなった。

彼女はまだまだとても若いが、小さいころから父親との関係に苦心した人だ。父親は教育水準の高い人で、繊細でしかも体格のよい男性だ。

どうも「ちゃんとしなければいけない」という観念が彼女を小さいころから苛んでいたように私には思われる。父親は弱いところがあり、「ちゃんとした」状況から逸脱するような彼女を打擲した。彼女は音声言語を発せなくなり、自傷、自殺企図が発生し、彼女が言うには複数の人格が彼女内に出現した。

彼女は東田直樹さんが自分に似ていると言うのだ。

難しい文章は書けるが文章を読んで理解

することが困難である。知的な障害があるとみなされるが算出されたIQに見合わない情報を取り入れたり発信したりできる。東田直樹さんも自身の使用する語彙が豊富なことから周囲による文章の捏造を疑われることもあるようだ。彼女もまた、複雑な文章を読めるのに何故言葉が理解できないふりをするのか？不動産屋とメールでやり取りするのに慣用語も漢字も使うのになぜ普段ひらがなの曖昧な書き言葉を使うのか？本当は自らの症状を偽るところがあるのではないかと時に疑われる。真実は正直なところ私には分からない。しかし彼女が自分はこうした人間だと思うのなら私はそれでよいと思う。彼女は「そうした人間」なだけなのだ。あとは彼女が苦しみ過ぎぬ程度に世の中と折り合いがつけばよかろうと思う。

彼女はしばしば尿閉になるかと思えば、失禁してしまう時期もあった。自らの意識か無意識か、下部尿路は意のままにならぬようである。そうして精神的な負荷がかかると心窩部痛が出現する。ネキシウムやレバミピドを指導医が用いても奏効せず。ブスコパンもあまり効かない。

一、二週間ほどすると収まる。EEGにも著明な所見はなくバイタルの変動もない。この間から彼女は外出訓練をするようになった。しかしそのことが彼女を不安にしたようだ。外出自体も彼女に負荷を与えたが、さらには一人暮らしやグループホーム暮らしのことを考え、彼女はどうも自らの容量を超えた重責を得たようだ。再び心窩部痛を訴え、呼びかけても反応

しない。

私は指導医に頼り、自らの遅鈍な頭脳で勉強を進める他にない。

看護師をはじめとした周囲が私を軽蔑している気すらしてくる。

「おいっ貴様医者なんだから患者を救わねばならんぞ。それができんオツムと体力しかないならば直ちに医者をやめよ」かかることを言う内科医は多い。これは真実である。

しかしながら真実は正しからず。私は神にのっとなって進む。

基本的に神様の言うことしか聞かぬ。

空谷子しるす

(2022.8.2)

多賀

多賀大社は近江にあって伊弉諾命を祀る古社である。古事記に「伊耶那岐大神は、淡海の多賀に坐す」とあり、少なくとも古事記の頃から伊弉諾命をお祀りしている。

朝から着古したスクラブを洗濯に出しに病院に行くと循環器内科医とすれ違う。会釈すると彼もわずかに会釈し目を反らす。

医局秘書の女性は看護師と話している。私は以前自分はなぜモテないのかと秘書の女性に問い詰めたのですっかり嫌われてしまった。しかしどうしようもない時は周りにぶちまけるしかない。自分が潰れて死ぬよりましだ。

スクラブを洗濯かごに放り込むと妙にお多賀さんにお参りしたくなった。天気予

報は雨だったのに空は徐々に晴れてきていた。もともと昨日は椿大神社が気にかかっていたが片道一時間半もかかるから無理だと思っていた。日頃からお世話になっているお多賀さんにお参りするのはとても適切に思えてきた。

多賀というのは不思議な土地である。

近隣の深い山の中に三本杉なる霊木あり、上古の昔伊弉諾命伊邪那美命の二柱はこの杉に降臨給いたのが多賀の宮の始まりという。多賀の山の中は深い。惟喬親王の都より逃げ給い、この多賀の山中に隠れ杣人に仏具を模した木椀をろくろもて作ったのが日本の木工のはじめだ。木地師というのは所謂木工職人のことで実に日本中の木地師は多賀山中の木地師の本拠地から印可をもらわねば商売する能わずと。大君が畑という地名は実に惟喬親王を讃えた地名ならん。なお政所とあるも惟喬親王のゆかりならん。政所に惟喬親王の墳墓あり。さらには政所は日本最古級の茶の木あり。樹齢三百年を数え、その味きわめて素朴ながら不可思議に複雑なり。政所茶は天津の中川誠盛堂にて販売せらる。

さて多賀三社参りとていつの頃から人の言うならん、多賀胡宮大瀧の三社もて三社参りと申すはいかにも滋賀県の観光誘致の方便なるべしと思ひ定めつれどもこれまた稀有なるご神縁の機会なれば本日いかにも晴天にて風涼しく、青竜山が私を誘うようだ。

胡宮神社は伊弉諾命伊邪那美命二柱をお祀りする古社にて創建の由緒不明ながら

上古の昔より崇敬せらるるお宮なり。かの東大寺を勧進したる重源もまたこの胡宮神社にありし敏満寺に合力の依頼を書状にしたためてあり。青竜山背後にあり。標高三百三十三米なり。これ昔は神体山、すなわち山自体が御神体であったことと思う。その証拠に山頂には磐座と小さな池あり。この池かつてはこの磐座参拝の前に身を清めるのに用いられたと伝わる。この池のあるによって龍神の山に住まいたることが連想されたことから青竜山の名が付いたかと思う。磐座は社殿を必要とする以前の信仰のなごりだ。岩に神様が降りてくるという信仰だったかと思う。山の中の巖にて神様をおろがみ祀った。山そのものが聖地のなり、ふもとから山を拜むこととなったのが神体山の信仰と私は理解している。胡宮の信仰は大変古いことがわかる。また麓には石仏谷と申して古くは十二世紀ほどの時代からのあまたの石仏、あまたの墳墓あり。今なお発掘調査せらる。敏満寺は天台宗の大寺にてもととの創建は飛鳥時代の敏達帝の御代になされた。以後拡大続け城郭を擁するようになったが十六世紀織田信長に焼討にせられて寺院ごとく灰燼に帰す。焼け残った礎石のたぐいを古井戸に投げ込まれたのが、平成のいつごろかに掘り出して胡宮神社の境内に積み上げてあり。これを焼石の塚と申す。胡宮神社は多賀大社と同じ御祭神にて延命長寿の靈験あらたかなりとぞ。

さて多賀三社参りの最後は犬上川上流に御鎮座せらるる大瀧神社にて、きびしい

巖を縫うような清流の傍らに坐すお宮なり。

これは犬上氏の祖先稲依別命にゆかりあり。御祭神は高龍神、闇龍神にて京都貴船の貴船神社と同じ御祭神にして水の神様なり。これは川の上流、水源地だからこうした神様をお祀りするのだと思い、「水の神」だったから後の世に水の神様である高龍神闇龍神を祀るとしたのだろうと思う。犬上氏は今の豊郷町に犬上神社あり、これは犬上氏の祖神稲依別命をお祀りする。なお稲依別命は日本武尊の王子なり。日本武尊は瀬田川の建部大社に祀られてあり。近江に日本武尊の足跡多い。そういえば伊弉諾命は琵琶湖を渡って大津の三尾神社に至った。長等山を目指して淡海を渡った。これは多賀の地から淡海を渡ったものか。近江には伊弉諾命の足跡も多い。三尾神社は全国に珍しい「兎」を神使とする宮である。

さて話を大瀧の宮に戻そう。

稲依別命、犬上の土地に至ってこの地を治めんとしたとき悪しき大蛇が犬上川に住まうと聞いた。これを討つため愛犬小石丸と共に探索に出たが中々大蛇見つからず。七日七夜過ぎて稲依別命疲れたものか寝入っていたら小石丸盛んに吠え始めて止むことがない。怒った稲依別命一刀抜き払って小石丸の首切り落としたら首は地に落ちずして飛んで藪の中に入り、藪に潜み居た大蛇が首に噛みついてこれを絶命せしむ。小石丸は主人を守るため盛んに吠えたのだ。稲依別命は愛犬の忠義に感じ、またその命失ったを悲しみ、

愛犬をこの地に吊い松の木を植えた。これ犬胴松という。いつの世に枯れたか知らぬが大瀧神社道路挟んだ向かいに犬胴松の木の乾いたものが今でも祀られてあり。小石丸の首は大瀧神社の脇、巖を縫う急流を覗くような場所に祀られてあり。さてさらに適当なことを書けば、敏満寺焼討の際に不動明王を救出したのは佐々木隼人庄宰相と申す者にて、今の世に至るまで不動明王を清涼山不動院とて敏満寺の集落内に守り伝えている。あまり調べていないがこの隼人庄と言うからには昔この地には薩摩隼人が移住したものか。たしか奈良時代に国策として隼人をあちこちに移住させたことありと開聞岳ふもとの資料館で見た記憶あり、その一例といえば山城は田辺の棚倉彦神社の隼人舞を見よ。舞に用いる盾には隼人の用いる赤い渦巻き模様が今も描かれている。さらには近隣に檜崎古墳あり。横穴式石室。古墳の様式はよく知らんが渡来系の影響ありと言われていて、考古学に知識とぼしく不勉強だからこれ以上はわからん。日本史では所謂遣隋使に犬上御田歙が行ったのは有名な話だ。それは小野妹子もまた渡来系氏族の出にして派遣された（近江は大津の小野に小野神社あり。小野氏は実に日本に最初に「おもち」を持ち込んだ大偉人が先祖だ。なお「おまんじゅう」を日本に最初に持ち込んだのは大和奈良、高天の交差点近くに坐す漢国神社、その境内にある林神社に祀られている人だ）のと同じで、犬上氏も渡来系

氏族かあるいは渡来の文化に詳しい氏族だったのであろう。

さても多賀、犬上、豊郷の地は面白い土地よ。歴史は深く複雑である。

よし、人から蔑まれることあったとしてそれが渡来、薩摩隼人の故に古代疎まれたならば、そのよし今は蔑むにあたらず。蔑まれることは別に近代江戸幕府のフィクションではなく古代よりのことだが、古代に遡ってその理由蔑むにあたらぬことを弁えるのが大切と私は思う。思うのだがこれはいかにも浅学の私が断言すべきことではない。

精神科の指導医に乞われるままに豊郷、犬上の自分の知っていること話したら喜ばれ、

「今からでもその道に行ったらどう」

と言われたのは医師が向いてないと言うより古代を話す私が楽しげだったからであらう。

実に文学部、古代史の研究で生き残るほどの卓越した実力は我に無い。無いが、医師として、またご神縁にて、こういう日本の神々のことは実は世界中の万国民に有用な気が私はするからできる範囲にて考えたい。神様が与えて下さるなら至るだろう。

多賀三社参りはよいお参りだ。

空谷子しるす

(2022.8.6)

一日

日野西光尊の「衆生ほんらい仏なり」を読んだり、関山慧玄禅師伝を読んだり、

インターネットでゲーム実況動画を聞いたり、ある炎上した配信者を数年にわたり罵倒するスレッドを見たりしている。苦しみとは日野西が言うように己の心が描き出すのみのものなのだろうか？

仏道にある人はしばしば、世の中のことはずべて自分の心が描き出したに過ぎず、無我になって暮らせばいきいきすると言うのだ。

さまざまな残忍な事件や病気や障害や迫害をうけて人は苦しむのだがそれらは自分の心の捉えようだと言うのだろうか。

幼稚園の時、私はオーストラリア人の神父が師であった。師は怒ったことは一度もない。真実やさしい人であった。

彼はなんらかの癌になり天理よろづ相談所病院にて帰天したのだったが、最後まで痛みにかかわらず微笑み病棟の患者や看護師に優しさを見せていたと言うのは病棟看護師の言葉だ。これは無我の人だったろうか。人が無我になるには神の御助けがなければ無理だと思う。

私は苦しいのである。腰が痛い。眠りが浅い。患者の管理がわからない。必死になって内視鏡を台に吊り下げる。医者になるには頭が悪すぎるように思う。

同期の研修医がたびたび研修の苦しみを訴える。私も苦しい。みなそれぞれに苦しい。

外に光が出てきた。雨は落ちてきてきたのだ。

私は神社に詣でようか考える。しかしこのあと、研修医と昼間から室内で酒を飲む約束をしている。遠出はしがたい。

床の間に神社の御札を置いて神棚として。毎日塩と水と米を上げる。手をあわすと心が落ち着くようだが、別に頭が急に良くなったり体の疲れや腰の痛みが取れるわけではない。伊勢の神宮を心に描き、拝殿の前に平伏して額着く想像を描く。「成る」と言われているような気がする。なんだか物事がうまく行く気がするが、苦しみは苦しみのままである。

無我になってひたすら人のために生きるとよいと日野西は言う。人のため人のためというと潰れはしないか。大学の救急の教授は自分が幸せでない医療なんかできないと言っていた。

私自身が苦しいのに人の苦しみを聞くとするのは救いがない。いまは酒はいらない。眠りたい。

空谷子しるす
(2022.8.15)

椿

ああもう嫌だなあめんどくさいなあと精神科病院の控え室でひたすらサボり、スマホの動画やら坂口博信の新作ゲーム *fantasian* ばかりやっているのは自己嫌悪に陥るが潰れて死ぬよりマシだと開き直っている。

病棟の患者はめしを食べるようになったが別の患者に肝障害が出た。黄疸もないし腹部症状もない。薬剤性を疑う。患者の飲んでる薬を調べる必要がある。しかし自分が必死こいて調べんでも指導医の方が自分より遥かに知識も技術もあるから、自分が切迫して調べんでも患者の

安危に関わらんから適当にやってやれと思う。
私はバカにされても仕方ない生き方をしているがバカにされると腹を立てる。
椿大神社と書いて「つばきおおかみやしろ」と申すのは伊勢国一宮の古社である。松下幸之助や岸信介の崇敬も厚かった。そのうぬぬは別にして猿田彦大神の総本社であり、倭姫命が伊勢の神宮を建てたのと同じ時にこの社の創建にも関わったと聞く。詳しくはよく知らん。なにしろ鈴鹿の山中には磐座が散在していて、いつから信仰の土地だったのか誰も知る者がいないのだ。猿田彦大神とは何者だったのかは誰もわからない。もし明らかにしたければ日本のあちこちを掘り返して古いものを見つけるしかあるまい。
椿の炭は製鉄に用いたという。どうも若狭のほうにも椿という地名があって製鉄に関わる。鈴鹿というのもスズというのは金属のことを指すという見方もあるらしい。もう少し北の員弁の方に行けば多度大社という古社があり、ここは製鉄の神様を祀る。鈴鹿というのは大昔は製鉄をやっていてだいぶ勢力があったのかもしれない。
椿大神社の境内には奥さんの天鈿女命を祀る椿岸神社があり。きれいでかわいらしい丹塗りの社だ。夫婦和合というのは一つの神秘だ。他人が家族になるのはとても不思議のことで、だからキリスト教でも結婚の秘蹟と言うのだろう。
精神科の外来には全般性不安障害になった妻を甘やかす夫とその家族、仕事に行

くと嘘ばかりついて適当にバックれた上にトレカやソシャゲに浪費癖のある夫、仕事でいじめられて弱った彼女をヤバいやババいと盛り上げていく彼氏、さまざまな男女が来る。
三界の火宅だ。世の中は一切がめんどうくさい。外来もめんどうくさければ病棟もめんどうくさい。病棟の患者たちはいろいろな人がいるがたしかに基本的にはわがままで、彼らの話を聞いて私が心を悩ますのは下らなく思える。
なんでもいいが一番の問題は私が楽しくないことだ。大乘にせよ小乗にせよ仏教的には他人に構うのが間違いの元なのだ。自分のことだけ考えておればよいのだ。自分が楽しければなんでもいいのだ。他人にちょっかい出すのは無駄だからだ。しかし人は人に左右される。釈迦の理屈はわかるけど目の前に他人がいたら心が動かされる。それが困るから修行でもなんでもして不動心を養おうというのだ。そんなバカな話があるか。世の中に不動心なんかあるものか。そんなものは神様しか持っていない。私はバカなりにズルく生きるしかないのだ。
椿大神社はいいお宮だった。私もやっかいなことから離れて神仙の世界に生きたい。しかし他人に罵倒されながら自分のバカさに死ぬまでのたうち回るのが私なのだから、それなりに生きて最後激烈に苦しみ抜いた挙句に死ぬ。そうしたらもしかしたらなにがしか報われるかもしれない。

空谷子しるす
(2022.8.17)

精神科 3

精神科はつくづく厭なところだ。患者の方々の話を聞くときの疲労感がすごい。しかも私は技術も知識も無く、勉強する気力も無く、ただ今この時を体験してなにがしかでも残ればそれでいいと思っている。それ以上に気張るのは私には不可能だ。自身の心身の容量では不可能だ。私がいなくても病棟は続いていく。今日明るい彼らが明日は不機嫌になったり暴れたりめしを食わなくなったりする。自然と同じだが医療者はそうも言うてはおれず対応を迫られる。私は幸いだったのは指導医はガチガチの理論派ではなく、矛盾を知る人間だったことだ。人にはそれぞれいいところがある。そのいいところを見ていきたい。指導医は良い意味でよいかげんだったので私はこそこそ逃げ回るを得、結果的に生き延びた。人間は善人であり悪人であるを地で行くのが精神科だったように思う。それは人間の自然だが、彼らはさまざまな理由でわがままなのでそれが余計顕著に見える。ものごとが移りゆく。

エビデンスを重視する先生がいて、「私は不安だから勉強する」と言った。なにかしていないと不安で勉強するのだそう。幼少のころおそらく ASD であり、親から注意されることが多かった。学校では周囲から浮いて、「勝たねばならない」と

思って勉強に打ち込んだ。それで医学部に来た。いまでもちゃんと臨床やれていると思わないから勉強を沢山する。

「そうしないとすぐに墮落するよ」と彼は言うのだ。

脳波の指導をしてくれると言ったが、私は脳波を読む努力をする体力が尽きていた。

「そんなものだよ。とりまぎれて読めないことはよくある。しかし医者はどうしてすぐダメになるから気をつけなさい」天地神明にかけて私は私にできる最善は私なりに尽くしている。

「自分なりのやり方」ではなく優秀な人のやり方をまねろとひろゆき氏が動画で言っていた。でもできんものはできんから仕方がない。

私が祈らなければ到底前に進むことも生きることでもできんのはそれだ。人のまねもできぬ、自力も乏しいとあれば祈るしかない。

それが正解かどうかは私が死んだ後に誰かが判断してくれたらいい。

空谷子しるす
(2022.8.19)

麻酔科

当院の麻酔科もまた破格に優しい。質問攻めも無ければ侮辱の言葉も無い。その上で部長先生は私の研修が順調だと言う。私は矛盾に頭を悩ませる。不勉強なのはどの科でも同じだ。聞かれたことはほとんど全て知らない。なのにある科のある医師からは侮辱され、別の科の医

師からは褒められる。
人間はいいかげんなものだ。
私は叱られたく無い。気分が滅入るからだ。叱られた方が勉強になると言う人がいる。本当に駄目な奴は叱られないから、叱られる内が花というのだ。しかし嫌なものは嫌だ。できるなら平穩に話をして欲しい。
青やかな稲穂は次第に早稲から始まる順に黄色に変わってきている。近江の田は収穫に向けて時間を刻んでいる。
私は相変わらずできる限りには懸命にやっている。アンプルを切り、バイアルから薬液を吸うのが多少うまくなった。挿管も筋弛緩がきまっているから割合に入るようだ。しかしこれを私の実力と言うわけにはいかない。麻酔のことは何もわからぬ。わかるということはない。2年目の医師にわかるほどしょうもない事柄が医業のはずがない。救急を恐れぬ優秀な研修医がいる。彼らは頭がどうかしている。私は自然が恐ろしくて仕方がない。2年しかやらないのに全てが分かるというのは絶望的な誤謬だ。
週頭に夏休みをもらえた。
病棟に患者がいないのだから今取っておきなさいと言うのだ。
病棟に患者がいると益も暮れも休めないのでは医者は極めて不健全な職業だ。
しかし休んでパァッと遊びに行くというのも私には分からない。
学生時代は金と時間がなかったから遊ぶ間はなかった。賢い研修医たちは東北一周をしたり北アルプスにこもったり男と

遊び回ったりしている。そんな遊び方は私は知らない。

結局どこかに祈りに行くことにした。遠くの中々行けぬところへ。それは江戸時代の伊勢参りをする町人と同じ精神性なのかと一瞬疑ったが、彼らは私よりよほど「参詣以外の付随物」が主目的であつたろう。私は参詣に行くために行く。そのためにいささか銭湯に浸かるくらいの楽しみは許されようと思っている。

空谷子しるす
(2022.9.3)

鉄輪

鉄輪温泉と言うのは別府八湯の一にしていわゆる湯けむりの街として有名である。貞観九年（西暦 867 年）に別府の高峰鶴見山爆裂せり。おそらくその噴火は辺りの野を焼き、火砕流、噴煙の類いが麓を焼きかつ埋めたのだらうと思われる。その惨状を治めたのが火男火賣神社の神だ。由緒にいわく

「大音響とともに無数の岩石を吹き上げ、溶岩が流出して河川をなした。鳴動は三日間続き、人々は神の怒りであると恐れたが、これを止めたのが当社で読み上げたときれる『大般若経』であった。（中略）大般若経は九人の山伏に命じ三日間読み続けられたとされている。そしてこの時に出来たのが別府温泉であり、その守護神としても崇められている」（加藤兼司宮司「火男火賣神社由緒」）

この鶴見山の大爆発以後別府は今に至るまで人々の業苦を緩和している。噴火を

鎮めた功績を讃えて火男火賣神社は延喜式の式内社に列せられている。大分県には式内社は6社しかないから朝廷からの認識の重さは並々ではない。さすが別府温泉だ。

台風が電車を止めたので別府に一日いることにした。

地獄めぐりをやってみようと思って鉄輪の方にバスで来たのだ。

鉄輪の近くに火男火賣神社が坐す。台風の強風が境内のイチイガシを大きく揺さぶる。空も海も青い。

私はなんだか湯に浸かってめしが食べたくなった。

「焼酎にかぼすを入れるとおいしいですよ」

と定食屋の女将が教えてくれた。

言う通りにするとたしかに爽やかでうまかった。

めしを食い、湯に入り、鉄輪の温泉街を歩くといろいろなことがぼんやりするようだった。

どうせ病院に戻ればまたはっきりしたことがたくさん出てくる。今はむしろ積極的にぼんやりしたい。

空谷子しるす

(2022.9.6)

宇佐

宇佐八幡宮は国東半島の付け根にある。神武の帝にゆかりがあり、もともとは宗像三女神が御許山に降臨したのが始まりともいい、八幡神が大神比義の前に顕われた土地である。

大きな参道沿いに「ねぎ焼き」を売っていた。

「ねぎ焼きですよ。どうですか」と中年の女性が呼び込む。彼女ひとりで店を回している。

ねぎ焼きを食べながら宇佐とはどういう土地なのだろうとぼんやり考えた。

参拝は叶った。

八幡宮の広大な神域を後にして私は駅に向かって歩き始めた。

はるかに山々が聳える。かつては内陸深くまで海岸線があり、今に田畑に見えるところは恐らく全て海であったろう。

私は歩いた。台風が近づいているらしかったが雨も降らず、雲はむしろ次第に薄くなるようだった。

青い山を見ながら歩いていくと生きている気分になる。

世は揺れ動くようだが本当のところは動かない。

頭で考えるより（正しいことにあっては）素直に思ったほうが良いように思われた。

八幡神は不思議である。

空谷子しるす

(2022.9.6)

筥崎 香椎

宇佐、石清水、筥崎の三つを称して日本三八幡宮と言うらしい。香椎は神功皇后の夫仲哀天皇の崩りましました地で古くから皇室の崇敬厚い。筥崎は応神天皇のへその緒を箱に入れて埋めたから筥崎と名前がついたという。

八幡神はいくさの神である。神功皇后の

三韓征伐に端を発する。応神天皇、神功皇后、比売神の三神を一般には八幡神と申し、古くから仏教との習合が深い。応神天皇の代に弓月君という秦氏の祖先が日本に来た。歴史は複雑である。

昔のことを調べるのは楽しい。あたまが悪いのできちんと知識を整理できない。できないながらも神々をたずねるのは楽しい。

筥崎に至り、大きな楼門を仰ぐと心がのどやかになるようだ。

憎むべきは悪心である。尊ぶべきは赤心である。神様に祈れば私はましな人間になるのであろうか。

新幹線にて博多より関西へ帰る。

帰って病院に来ると相変わらず一部の研修医たちから挨拶もろくにされぬ。馬鹿にされている。

神社に詣でも仕方のないこともある。

空谷子しるす

(2022.9.9)

若狭

麻酔科の研修が終わった。

当院の麻酔科医師たちは破格に優しいが、麻酔の緊張感にいよいよ耐え難かったから研修が無事に終わったのはありがたかった。人間は確かなことはひとつもない。自分が入れた薬の動向を片時も目が離せない。それは私が低能の医者だからかもしれないがそんなことはどうでもよい。麻酔科の医師たちやオペ場の看護師たちに大変守られて私の研修は終わった。

若狭彦神社の上社と下社は若狭国一宮で

ある。

鯖街道沿いにあり、上古の昔から往来があった。若狭神宮寺の由緒によればワカサというのは朝鮮語のワカソ（往き来）から来ているという。若狭神宮寺には印度から来たと伝わる僧実忠がかつており、彼が今に伝わる東大寺修二会を始めたという。前にも述べたが越前敦賀の名の由来も新羅の王子に端を発する。若狭も越前も大陸との往来が盛んであった。

若狭彦神社には彦火火出見命を上社に、豊玉姫を下社に祀る。彦火火出見命は神武帝の祖父であり、宮崎や鹿児島に多く祀る。若狭彦神社を下って海側に行くと常神半島があり、そのあたりには日向という地名があちこち残る。そのあたりの人々は祖先が日向国から来たと伝わりとインターネットで記事を見たが本当かはしらん。

台風が近づいていると聞いたが風は柔らかく水は清らかであった。

若狭彦神社の二社は不思議に巨しく、剛毅でありながらどこか優しげである。

二社のさらに上流に若狭神宮寺と鵜の瀬がある。

鵜の瀬というのは東大寺修二会の際にお水送りをする淵である。淵が水中洞窟となっており東大寺若狭井の水に通じているという。

東大寺の創建に関わった僧良弁はこの鵜の瀬の集落下根来の出身なのだを知る。

鵜の瀬の水は澄んでいて淵が青い。流れる川の水を眺めながら私はなぜ自身に気分の浮沈があるのかなと思った。

ひとすじに夢中になることができないのは何故なのであろうか。

自分のことはいよいよ分からない。なにかが分かるというのは幻想にすぎんのかもしれぬ。私は自らの認知機能の低下を疑うほど茫漠としている。叢雲が十重二十重に棚引き、山の上に蒼穹が雲間から見える。

私はいよいよ祈る。

空谷子しるす

(2022.9.17)

三輪

よく三輪に参る。

細かいことはよく知らないし改めて調べることも何となく今は憚られるから書けない。

三輪の大神は大物主命と申し上げて大国主命の別名と伝わる。三輪の大神神社は本殿を持たない日本最古の神社にして山を直接奉る宮である。

三輪山の麓には磐座が多くある。岩に山の神が宿るのか岩そのものが神なのかよくわからないが岩を祀る。

三輪の山もとには金屋という土地がある。金属加工者の渡来人たちが住まいしたと思う。また海柘榴市という日本最古の市場がある。さまざまな人が往来した。出雲という土地も山もとにあり。出雲のはらからが住まいしたか。すぐ北には穴師兵主社あり。相撲の起源の地であり著名な渡来人たる秦氏の祖、弓月君ゆかりの古社なり。

なんとはなしに日本はさまざまな人々が

入り乱れて国を作ってきたように思う。

奈良の都には中国、朝鮮はもとよりペルシャやインドから人が来ていたようだった。

破斯清道という奈良時代の官吏はペルシャ人だという説があるし奈良の大仏を開眼したのは菩提僊那というインド僧であった。

縄文時代の人々の交通は日本中に及び、各地の出土物は入り混じっている。

延喜式内社の中には八丈島の神社がある。上古の昔にどうやって人々は八丈島に渡ったのであろうか。

私はものを知らないし頭が悪いからきちんと話すを得ないが、どうも私には日本の昔はいわゆる「犬神家」みたいな閉鎖的な空間には思えぬ。

丹生川上神社上社の旧社地はダムの底だがそこには縄文中期の祭祀遺跡がある。宮の平遺跡と申す。奈良南部の深遠な山中にまで縄文人は入り込んでいた。何を思って古代に人々がこんな深山に入り込んだのか分からない。なにか外敵に追われてこんな山中にまで逃げたのであろうか。怨敵の残虐はよく人を奔らしむ。しかしよくここまで入ったものだと思う。外敵に追われたとか元の村の人口が増え過ぎて口減らしのため追われたとかいうには山の中が過ぎると私は思う。

十津川村には上古の昔からの社である玉置神社がある。べつに縄文遺跡が出たわけではないがそもそもこんな山の中になぜ極めて由緒の深い古社があるのか分からない。

なんだかよくわからぬが人は靈威を感じて動くことであろう。姫路に広峰神社という社がある。牛頭天王を祀り元八坂を名乗る。吉備真備が遣唐使から帰る途中に広峰山に靈威を感じて社の創建を奏上した。

縄文の人々も靈威を感じて深山に入った気がしてならない。また交易で日本各地を移動していた。同時に種々の人々がさまざまな土地から日本の洲々に入った気がしてならぬ。

神仏の道に沿うことが何より大事であり、神仏の道に沿うたならば異なる風はむしろ淀みを清めることと思う。

偏狭、村八分、奇妙な実力競争主義、根性、つまらぬ血族主義などはいかにも日本古来の在り方ではあるまい。それらは日本人以外の諸民族においても有害な思想であろう。万民これを棄つべしと私は思う。

マーク・テーウエンなるオスロ大学の先生は2017年 vol.45-2の「現代思想」に神道をテーマとして寄稿している。いわく「『神道』が根源的な『和』への回帰というユートピア的構造をまとって現れた」とある。テーウエン先生の言葉はその通りかもしれない。“日本人”はある種の危機を感じると、無形式で無教義ゆえに可塑性があり、しかしながら一定の儀式的定式は認める確かさもある神道にすがり、ユートピア的な思想を紡ぎ始めるのかも知れない。

そうだと思う。私もある種の理想を神道から紡ごうとしている。私は明らかに非

論理的で直観的だ。

ことばにすると間違ふことがある。人をことばで恣意的に動かすというのは深刻な誤謬である。人は動かすことはできない。騙して動かしたように思っても必ず穢れ誤つ。思想はしばしば過ちの素になる。人は各々の直観で動くこともある。ことばが相手の知らない部分に響いて、その人間の意識しない内に自然に変わることはある。人は変わる。人を変えることは絶対的に不可能である。

ことばにするなら直観にもとづいてなるべく率直に成したい。

空谷子しるす

(2022.9.19)

小児科 2

「僕が1、2年目のときは君なんかよりずっとくそ真面目だったよ」と指導医は言うのだ。

彼は20年目以上の医師であり神戸中央市民病院で初期研修をした人である。

黎明期の神戸中央市民のような卓越した病院で研修をしたならば間違いなく私は屑だろう。

喘息の患者が来て入院することになった。

「僕がやるか、君が全部やるかどうかどうする」と言われ、

当たり前だが無能の私より有能の指導医がやった方が患者には好ましいのだから私は正直に「自信がない」と言った。

指導医は「2年目だろう」と言い呆れた。しかしあるとき病棟でカルテを書いていると消化器内科のNo.2の先生が隣に来了。

「小児科で主治医になってるじゃないか。すごいな」と言われた。

なぜ彼が専門と関係ない小児科のことを知っているのかわからなかったが嬉しかった。その患者が何もやることのない退院待ちだとしても嬉しさを感じた。

誰だって自分を馬鹿だと思いたくない。

「いつときだって自分を馬鹿だと思ってられるか」と志ん生の『火焰太鼓』の主人は言う。

しかし明らかに私より同期や一年目の方が優秀であり、小児科指導医は彼らをよく褒め、私のことは褒めない。

こんな汚い無様な男が35歳の初期研修医なのだ。人から褒められないとかけなされるとかで精神の平衡を失う。小学生のような幼稚さを固持している。こんな醜いことがあるか。「大人の男」になれていない醜い中年男性というものはこの世で最も唾棄すべき存在だ。一体いまままで何をしてきたのだと言われたら、わずかに生きていたとしか言いようがない。大量の言い訳はできる。背負わなくてもいい労苦ばかりだった。私に関係のない災難は大量に降ってきた。脆弱な体躯の私にそれらを跳ね返す力は無かった。しかし世の中は目に見えることが全てだ。私はこの世に生きていく必要がない。無能の醜い中年男性だ。私のしてきた苦勞だって、平均的な男性なら必ず克服できただろう。つまりところ私は生きるのに必要な資質がない。

私はよい医者になりたい。

しかし無能であればよい医者にはなれな

い。

私はどうしたらよいのか。35年生きてまだ無能の私はさらに無能として憎まれながら進むしかないか。

私はとても醜い。

空谷子しるす

(2022.9.29)

誤診と信心

とうとう私は当直中に重大な誤診をした。絞扼性イレウスを見逃した。

80歳の男性は腹痛に苦しみ、前日朝から排便がないと訴えていた。私は便秘を疑ったが年齢が高いから、なにかで閉塞していたら嫌だなと思い単純CTを施行した。画像を見た上で私は回腸の明らかな壁肥厚と横行結腸の狭小に気づかなかった。男性の看護師が一言「造影CTの準備できていますよ」とだけ言った意味が理解できなかった。

他の患者対応に取り紛れている中で指導医が彼を外科に紹介した。

私一人なら彼は死んでいた。

私はこの経験で自分を責める真似はせず、ただの現象に還元しようと思っている。つまり「こういう画像が絞扼性イレウス」という一症例に還元しようと思っている。しかし無意識は私を苛んでいる。特に私は周りが私を無能だと思うだろうことに恐怖を感じる。看護師が、上級医が、研修医が私を見下すことを恐れる。

私は北陸の妙好人のようなひとすじの信心の世界に憧れる。雪の冬の晴れた日に潤い冷たくわずかな気流が鼻を抜けるよ

うな感覚を感じる。小テレジアのようなひとすじの信心に憧れる。暗い部屋の中に光が差し込むようなひんやりとして温かい感覚に憧れる。

ただ信じる、ただ耐えることはとても難しい。私は疲れ、なぜ昨日はあんなにどの症例でも頭が動かなかつたろうと疑問を持つ。等身大の私の実力だと思う。「もっと鍛える」必要はある。自力。自力の伸長。

他力に全てを任せるとするのは自力の伸長を放棄することとは違う。

いわば自分の意識や素地が他力のことしか考えぬので、客観的には遅鈍ながら自力にてわずかに努力している。その努力の遅鈍なことはしばしば責められる。しかし、客観的な努力の向上すら、実は弱い者にとっては一切を他力に親しんだ方が良好である。頭の中には他力しか目に見えておらず、安心の境にあるのみなのに、客観的にはそちらのほうが仕事はしている。

ピオ神父は「不安や焦りは沢山の仕事をするように見えて実は何もしない。まず祈り、安心しなさい」と言った。これは真実である。

「夜と霧」の中で、歌を歌う人間や神に信心する人間がかえって生き残ったという話を読んだ気がした。

私は大きな危機があると、苦しみ悶え母や兄に恨み言を喚き散らした後、安全弁のように北陸の妙好人や小テレジア、ピオ神父のイメージが訪れる。

浄土教と、カトリックと、神道と、ある

いは他の一筋の信心とが、互いに異なりながらどこかで同じものになることを期待している。

空谷子しるす
(2022.10.2)

春日

春日若宮社が20年目の式年造替を果たし、そのしめくりに境内に白砂をまく「お砂持ち」を行うと聞いたから母と赴いた。お砂持ちには一般人の参加もさせてもらえるので、春日大社の駐車場に車を停めて若宮に向かう。

母は先週の椿大神社の神山入道が岳登山中に転倒し、大腿内側に打撲を負っていた。整形外科によれば著明な骨折認めず、脳外科によればいまだ頭蓋内に著明な血腫なし。しかし歩くと痛みを伴う。20年ぶりの行事だから無理をおしても行きたいようだった。

春日の空は晴れていた。

風もなくやわらかな光が御蓋山の原生林に差し込んでいる。

藤の老木が伸びて、化石のような力強い体軀を見せている。

私たちは手渡されたちいさな袋に灰白色の砂礫を詰めに詰めて、改まった若宮社に案内される。

朱。というものがある。赤い塗料だが、まことの朱はこの春日大社の本殿と若宮社にしか塗られない。日本の中でここだけの朱塗りである。

まことの朱は上等の紅しょうがのような色調で、しかも深くて淡い。香りたつよ

うなその赤色は邪気を払う。
私たちは新しい若宮社のまわりに砂を撒いた。
陽は暖かく、世は改まりいよいよ力を増す。

空谷子しるす
(2022.10.2)

多賀 2

昨日は土曜日であった。午前中病棟に行くと部長先生がおり、彼の患者を共に診察して色んなことを教わっていたら午前が過ぎた。

私は自慰をすべきか否か悩んでいた。中学 2 年に精通して以来、自慰をすると自分が醜く、さまざまな能力が低下し、他者からもますます嫌われるような思いがしてきた。

南方熊楠いわく、南水漫遊という本に鉄眼なる高僧あり。雪中庵にて閑居しておれば一人の見目麗しい婦人来たりて宿を乞う。鉄眼若き丈夫なれば己の煩惱の火がつくをおそれて婦人に宿を貸すを渋ったが外は大雪だ。婦人は人の妾なれば本妻に妬まれて追い出され郷里に帰る途中の大雪なり。婦人このままでは野垂れ死すべしとて鉄眼に涙ながらに訴える、鉄眼もとより心清ければこの婦人の命救わざる能わず、やむを得ず婦人と一晩同じ屋根の下にいることになった。婦人命拾いしたりといえどもやはり若い男と同じ屋にいること不安でならず、床より鉄眼の様子伺えば鉄眼あろうことか己の屹立したる男根に自ら灸を据えて必死に仏念

じては耐え居たり。夜が明け女出でて、本妻死にたる上に改めて自らが本妻になった後夫にかの雪の夜の顛末語る。夫、大きに感心して鉄眼探し出し寄進することひとかたならず、寺が建ち一切経を出す手助けとなったと。

性欲を一生がまんしたら私も少しは立派な人間になれるだろうか。鉄眼のような立派な人間になれるだろうか。私の陰茎は勃たないのに性欲だけは多少ある。

貝原益軒の養生訓にいわく 30 代の男は 8 日にいっぺん射精すべしと。

貝原益軒が正しいのかどうかわからない。射精をがまんするのはむしろ体に悪いのか。

真剣に考えていたら腹が減った。卵と牛乳が尽きていたからコンビニに向かった。外に出ると空は青く空気は澄んでいた。

私はお多賀さんに参りたくなった。

夕に近くなりお多賀さんは閉門まぢかであった。

秋の夕の傾いた日に照らされてお多賀さんの檜皮はいよいよ美しい。

多賀の杜には人はまだいささか居り。女子中学生の群れがみくじを見せ合ってきゃあきゃあ騒いでいる。大型観光バスで来た高齢者たちが写真を撮っている。夫婦づれが並んで歩いている。

私は小あゆの煮付けと一合の酒を買って帰った。

結局その日私は自慰をした。筒井康隆がやってしまった後の背徳感があるから自慰はいいというようなことを書いていた気がする。筒井康隆の言うことはいつも

よくわからない。

自慰をした私は日曜の当直を無事に乗り切れるだろうか。

自分のやれることをやり神様の御助けを期待するしかない。

空谷子しるす

(2022.10.9)

小児科3

退院サマリーを非常に細部まで指導を頂戴した。書き直したが一部に見落としがあり、指導医が「二度目だよ」と怒りを滲ませたのは仕方ない。

指導医によってスタンスがちがう。

私はいい加減こうしたことに慣れないといけませんが、生来の粗忽のせいなのかよく手抜かりがある。

担当していたこどもたちは幸いなことにみんな元気になり退院した。私は深く神様に感謝する。

しかし指導医から叱られたり（それがありがたいことはわかっている）一年目から嫌がられたりすると落ち込む。私は弱い人間である。褒められたり気かけられたりしたい。

私は白山のことを考えた。

白山は日本を代表する霊山のひとつであり美濃と越前と加賀にまたがる。

生まれ変わりの山でもある。白山の神は菊理媛命と申し、伊弉諾命が冥府より戻ったときに現れた神である。

白山はとても特別な山で私は大好きな山だ。一番の山だと思う。

東の山々、美濃の山々が気にかかるので、

何とはなしに色々地図で調べていたら美濃禪定道に行き合った。

白山に登るのは休みが取れない。しかし禪定道の社に参るのはあるいは可能かもしれない。

私はいつも答えを期待している。なにかこうしたらよいという方に導かれることを期待している。また、今後の苦しみが避けられることを期待している。仏に手を合わせる時は、キリスト教的に言えば煉獄にあるだろう私の先祖が救われることを期待して灯明を上げる。

私は知らず知らずのうちに白山の神に助けられてきている。登るたびに大きな慰めを得る。その気分のまま、下界で暮らし続けられたらいいないつも思う。しかし私の心は揺れ動く。

私は週末、天気が許せば美濃禪定道に向かいたく思った。

空谷子しるす

(2022.10.13)

富波

富波というのは近江の野洲の土地でいくつか5世紀頃の古墳がある。

富波に思い入れがある訳ではない。祇王の伝説がこの辺りにある。8号線を車で走ると妓王の文字を良く見る。祇王というのは清盛の白拍子である。寵愛を受けたが後に清盛の心が離れて出家した。今も祇王寺が京都奥嵯峨に残る。

その祇王の出身がこの辺りで、祇王が清盛に訴えたから祇王井川と童子川という水路ができたというのだ。伝説にいわく

当時には野洲の地は水不足であった。祇王は清盛に故郷の渇水を助けることを願いそれがために水路が開鑿せられたというのだ。

水路開鑿の折に水が行き詰まり工事が蹉跌した。すると謎の童子あられ「我の引く縄の後を掘れ」というから言う通りにしたら水路が通じた。それで水路の上流は祇王井川、下流を童子川という。水路は野洲川から日野川の間を走っているがそんなことはどうでもいい。

近隣に菅原神社や屋棟神社あり。屋棟神社は昔は妙見宮といった。やや離れたところに見星寺あり。由緒はわからない。見星というのは釈迦が十二月一日から座禪三昧に入って八日目、暁に流星を見て大悟徹底されたことを見星悟道と申すことに端を発する。というのは大分の見星禅寺の由緒に書いてあった。

この土地には古くから星の信仰があったのかもしれない。妙見宮は北極星の信仰である。菅原神社があるのも雷神信仰がもともとあってそこに道真公の信仰が重なったのかもしれない。そもそも京都の北野天満宮も彼の地に雷神信仰がもともとあったという話をどこかで聞いた気がする。雷神信仰や星の信仰は渡来の人々の信仰だ。天満宮のある所は渡来の人々の土地であるかもしれない。大阪の服部天満宮は道真公以前より秦氏の信仰の土地であった。日本にも常陸の大甕神社のようにごく稀に星の信仰もある。しかし星神は日本の神社には稀なことである。雷神は日本には武甕雷命、鴨別雷命などおわし

ます。

なんとはなしに祇王の伝説に心が惹かれてあれこれ調べていると様々なことを思う。本当のことは何もわからん。

縄文の人々が国津神なのか弥生の人々が天津神なのかもわからん。

しかしいずれかの国のいずれかの人の言うような縄文と弥生とどちらが優で劣ということはない。いずれもただなんだかよくわからぬ神の道というものに沿うことを思う。卑しむべきは人の欲や悪である。尊ぶべきは赤心である。外と内とにその違いは何もない。

空谷子しるす

(2022.10.14)

専攻医

もはや私は立場上初期研修医ではなくなつた。

某大学のなかで私は小児科医として勤め始めた。

「〇〇先生と同じことができるようにならないといけないんだからね」

「患者のことは全て把握しないとイケない」

と、病棟医長は仰る。

私は少しでも自分が成長すること、患者の害にならないことだけを考えている。

専門医の資格がとれるかどうかはわからない。明日のことを思い煩うなど聖書にある。私はその通りにしようと思う。

大学病院は極めて複雑な病態の方々ばかりである。今の自分にはわからないことが多い。

自分がどう言われたとしても、患者の害にならないために動きたいと思う。
ようやく一週間たち、体は重たい。
うまくいくことを祈る。

空谷子しるす
(2023.4.8)

専攻医 2

病棟は忙しく、いったい自分がなにをやっているのか、なにをやらなといけな
いのか未だに判然しない。
ただ神に誓って私は私にできる最大を行
っている。
忙しいときはいつも飯が楽しみになる。
朝はもともと食べづらく、昼は忙しくて
食べられず、晩に食べるものが楽しみに
なる。
この病院周りは都会なので店もいくつか
ある。トルコ料理、インド料理、うどん、
カレー、ラーメン、上海料理、いろいろ
ある。街はいい。歩ける範囲になにかあ
る。でも次第にこの街も何かあるよう
に見えて実はあまり何もないように思え
てくる。私は贅沢にできており、すぐ
に悪い意味で慣れるのかもしれない。
昨日は卒後 5 年目の専攻医の先生と飲
みに行った。彼もまた児童精神、小児神
経志望であり、北杜夫や三島由紀夫を好
むと仰す。
夏目漱石が好きだという人間にあまり
出会わないのは不思議なことだと思
う。私は夏目漱石が好きなのにあまり
そういう人がいない。私が山ノ口獏が
好きだというとそこは投合した。山ノ
口獏を好む

人間の方がずっと珍しい。
酒をしこたま飲んで朝起きると頭
にもやがかかったようだ。今日は本
当に病院に行かなくていい日なの
だ。外は天気がいいからどこかお参
りに行こうかなと思ったが体と頭
がぼんやりしてなかなか動かない
のだ。

昨日 5 年目の専攻医から教わった
パンチブラザーズとモーズアリソン
を YouTube で聴いているのだ。聴
きながら関大徹「食えなんなら食
うな」を読んでいる。関大徹は禅僧
である。以前、梅田で箕面の神父
と I 先生を待っていたときに見つ
けた。そのせいかこの本を読むと
箕面の神父を思い出す。神父はた
しかに禅的などころがあるように
思う。まじめな宗教はいずれも禅
的なのかもしれない。

外の天気がいい。紫外線が強烈だ
ろう。貴船や鴨社のことを思うが
遠いしとて行きたくはならない。
廣田社も遠い。心のままに動きた
い。

眠い。頭がすこし重い。

「明日のことは明日自らが思い悩
む」という聖書のことばはとて
もありがたいことである。

空谷子しるす
(2023.4.22)

専攻医 3

兄が不快だという。両家の顔合
わせの日取りを、彼女の都合のみ
で決めたかと疑ったからだとい
う。

母も不快だという。妹家族へ
のお持たせを用意すべきかとの
母の問いに、彼女が

「それでいい」とぞんざいに答えたと思ったからだという。

ふたつとも私の文章がぞんざいだったのが原因だ。兄には顔合わせの日取りの候補日だけ伝えて来ることができるかどうかのみ伺った。候補日を決めた経緯を書かなかった。私たち二人の休日が重なる日がそこしかなかったことを言わなかった。

母には彼女が恐縮していたことを伝えなかった。

雨が降る京都は蒸し暑くなってきた。

病棟ではさまざまな患者の子らが、それぞれの事情を抱えている。その親たちも、それぞれに疲弊し、あるいは張り詰めた感情を抱いておられるように思われた。

当直をこの日とかわってほしいと二人の医員から相談された。小児科は小児科の当直と各診療グループの当番がある。シフトが複雑に感じる。

雨が降る。

私は彼女の姪に贈るためにポケモンセンターに歩き、御所八幡、六角堂に詣でつつ、街中を歩いた。

街は人間と家とが立ち並んで、しかも京都らしい取り澄ました感じがあって厭気を感じさせないところがかえって油断ができない。

物事の複雑さはいよいよ増してきたように思われる。「ふつう」の医師ならこの程度の複雑さは容易に乗り越えられるのかと疑う。

母校の救急の教授だった E 先生は私の何が良医になるとふんでくれたのだろう。

初期研修先の小児科部長の I 先生は私に何を期待したのだろうか。私は綿のように疲れた。疲れたのに、ほんとうに人ほどに働けていないことがつらく感じる。病態や治療が把握できないことが困る。

歩けたのはよかった。室にこもっていれば、そのまま動かなかっただろうから。歩いたほうが少しは頭が良くなると期待するから。運動したほうが頭は良くなると精神科医の youtuber が申ししていた。すがれるものにはすがりたい。

山が雨で煙る。あの山は大文字山、しかし本来の名前は別にある。あの山のふもとは熊野的那智社があり。熊野の大神様、何卒病棟の子らが助かりますように。私がよい小児科医となれるほどの知恵と力をお貸しくくださいますように。彼女と睦まじい暮らしをしていけますように。大切な人たちが幸せでおれますように。

空谷子しるす
(2023.4.29)

専攻医 4

病棟の兄のひとりが危うかった。

私の担当ではないが、いままでカンファレンスでも危ういという印象は私は持っていなかった。画像上危ういことがわかった。症状もよくないようだった。

医者は人の極まるところを見る。医者としてはしだいにその職責に慣れていく。しかし人間としては慣れることはない。

私は所属グループの当番を終えて御所に来た。

春の御所は新緑にまみれて、風は涼しくて爽やかだ。

うんかがくるくると宙を舞う。その先に空があり雲がある。その上に飛行機雲が東西に伸びていて、風に吹かれて次第に薄まっていく。

長雨が午後から止んだ。御所にはたくさんの方がいる。英語やフランス語が聞こえてくる。二度と逢わない人たちがいる。私はPICUの先生に話しかけられた。それで来年度からのべつの病院で集中管理や救急をやろうと誘われた。

母校の集中管理の教授は私にとってもよくしてくださった。「enjoy your life や先生」と彼はよく仰ったものだ。

ドンボスコがとうとう孤児院をやる金が尽きて、石段に腰掛けて涙を流した。そのときにふとある男が彼をみつけ、彼に孤児院をやるための新しい物件を紹介したという。

私たちは苦しまねばならない。いつまで生きるかしれない。生きていく限りは苦しむのである。しかしその先に、「軸」があればその先に、神様の導きがあることを期待せねばならぬし、期待したい。

私たちには一秒先のこともわからないのだ。分からないから、不安になり、泣き、わめく。そうしながらも祈り求めるのが人間の真実の姿なのだと思う。

空谷子しるす

(2023.4.30)

専攻医 5

何日に一日はいよいよ頭が動かなくなる。

たぶん睡眠が不足するためで、夜中にだらだらとスマートフォンをいじるのが原因だろうと思う。

すべての児は可愛らしいものだ。彼らは全員人間である。人間だからいいところも悪いところもある。

奈良の長谷も紀伊の高野も山岳霊場であり、御霊がつどう山であったと五来重は「高野聖」の中で書いている。

高野も長谷も昔からの神の住む土地であった。長谷坐山口神社や丹生都比売神社の存在はいずれの土地の古さを物語る。

してみると、こうした山に祖霊が集まり、墓がたつのは仏教以前の話であり、その霊を祀るのには神の力のみならず仏の力が必要であったのだろうか。伊勢の神道は厳しく仏道を忌む。山に霊が集まる信仰と伊勢の神道とはどうも別のものようだ。

山に霊が集まる。それはあるいは神霊であり、祖霊である。荒ぶる魂であるが、蕃神にあらず。このことは世界に普遍の現象だろうか。あるいはこのことが日本人の重要な要素なのかもしれない。

熊野もまた死者の国であった。大雲取峠を行けば死にたる者とすれちがう。

毎日の仕事は沢山あり、複雑で私の能力に負えない。負えないなりに生きているのみである。この先どうなるかなど神様以外誰も知らない。

空谷子しるす

(2023.5.11)

専攻医 6

ぐちが言いたくなる。

6月から中間医と研修医の先生が変わる。中間医はまったく新しいところから来るので、大学の電子カルテシステムがわからないはずである。

複雑なことばかりだ。

私たちは先のことを考えることを求められる。先のことは考えたくない。明日のことは明日自らが思い悩む。今日の労苦は今日だけで十分だ。

私は成長しているのだろうか。一般的な医師としての力はあまり増してはいないだろう。しかしなにかの流れで来たのだ。もはや目の前のことだけを考えるしかあるまい。先のことは考えたくない。多くの場合先のことを考えるのは不利益ですらある。

結局私はいつも同じなのだ。理知的でない。わけがわからないままに歩いている。わけがわからないまま求めて、あがいて、今こうして大学の当直室から東山を眺めている。わからない。私は正しいのかどうかわからない。人の普通歩まない道を歩きつづけている。私は正しく最後を迎えることができるだろうか。よい人生を生きたい。

彼女が結婚式は金がかかるねと言う。その通りだなと思う。しかしやれるだけでやるしかあるまい。

熊野の大神様、白山の大神様、何卒お守りください。

空谷子しるす

(2023.5.17)

専攻医 7

病棟の児はまた別の問題が発生し、しかもその病態は難しくてなかなかどの医師も分かりきることはないのだから、これは困ったことだ。

さまざまな化学療法の数々が治療期間の終わりに特定の検査を要求する。しかもそれらはすぐに予約できる類の検査ではなく、さまざまに調整しなければならない。ひとつずつ弁えればよいのだが、その余裕はない。自分の余力を削ればやれるかもしれないが、自分が死んでは何にもならない。

6月から中間医と研修医の先生が変わる。担当患者や病棟規則を知る人間が私だけになる。私もそれらを充分には認識していない。明日のことは知らない。そうだから私は祈る。他の人々が祈らずに自力で生きていけることは私には信じられない奇跡である。私には不可能のことである。私は自力で生きていない。祈るうちに…他人からはなにか合理的に後付けで説明されるけれども…なにかの形で解決を見る。それは決して私や他人が望むような浅い形の解決ではない。

週末に比叡山に登った。比叡というのはもともと日枝と申し、日吉大社の神山であった。その靈威はいまだ息づいている。西塔を遍巡り、明らかな初夏の日差しに緑苔がきらめく様は応えられないほど美しい。その落ち着いた雰囲気の中に伝教大師の御廟がある。つつましくも美しい空間は比叡の権威とは無縁なようだ。伝教大師この世を身罷らんとし給う時に

仰すには「我が志を述べよ」と。きっとまじめな人だったのであろう。一切皆苦は変わらない。変わらない中に私はどうなっていくのか全くわからない。私は医者になれるのかわからない。いま私はどうなっているのかわからない。彼女が私の優しさを愛すると言う。私は自分の優しいことを思わない。彼女は彼女の私を好きな理由を私が信じないとやって悔しがらる。世の中にはわからないことがあるということを知っている。人間だから当然同じだという前提がないことを知っている。彼女はもしかしたらその前提を信じられる人間である。幸福な人間である。私はそうした意味では人間ではない。私は理解したい。私以外のものは全て私と異なっている。異なるものを理解したい。しかし私が他と異なることを信じられる人間はほとんどいない。私が同じでないことに気づくと、私の無理解や消極性をなじり、怒る。私は他者を理解したいと願っている。しかし自分の心身を犠牲にしてまで同化することはできない。私には常に疑念がある。全ての他者が私を心の中で愚弄している疑念がある。それで常に全ての人間関係について割り引いている。常に信頼しきることがない。なぜならば私の能力を、全ての他者は大きく超えているからだ。私のあらゆる実務的能力を全ての他者は超えるからだ。だからもし私より実務能力が劣る稀有な人間が現れたら私は無意識に笑みが止まらないだろう。本能的に見下すだろう。

いままで見下された劣等感が原初の癒しと救いを求めて裏返し、渴いた魚のように貴重な優越感を貪るだろう。私は優しい人間ではない。劣等の人間だから低姿勢でいる。弱者の身振りをして自分を全力で守るだけである。見たまえあの大比叡を。元三大師の切なる祈りを見たまえ。浄土教の先駆者たちの切なる修行を見たまえ。日枝の神を拝見したまえ。一切はわからない。一切は私の能力を超えている。祈ったところで何かを変えるわけではない。しかし祈ることが何よりも重要で何よりも具体的で唯一有用な手段である。祈ることだけが卑怯な私の持つ唯一の真実である。

空谷子しるす
(2023.5.24)

比叡

京から比叡に登るには雲母坂を行かねばならない。花崗岩の風化した砂礫がざらざらする。木々は茂り、くぼんだ坂道を湿気と暑さの中に汗を垂らしながら登るしかない。坂本のがわには日吉大社があり。東面した金大巖が太陽の光を浴びると鏡のように光るという。比叡山は古くからの信仰の山である。いかなる人間の歴史も、山の靈威を塗り隠すことはできない。いかなる人間の信仰も、山の靈威を置き換えることはできない。山はやや涼しくなってくる。

都のそばの山であるのにこの勢いはどう
だ。

比叡の山の上、西塔、さらには横川のほ
うまで行けば日枝の山のまことの姿が垣
間見えるだろう。

なぜ全ての人は救われぬのか。

一切皆苦の果てに救いがあるのか。

救われるために苦しまねばならぬのか。

あたまの悪い私はどうしたらあたまが良
くなるのか。

見よ蒼穹を突く大比叡を。真実は身近に
ありながらしかも一切がわからない。裏
も表もないのに目に見えない。

賢い人は幸いである。祈らずにすむ。

空谷子しるす

(2023.5.24)

研修医・レジデントの先生のエピソード
を随時募集しております。応募は下記の
メールアドレスまでお願いいたします。

rinshoubungeiigakukai@gmail.com